いっど、いっが山川港の会（指 宿 市）

発表者：田　中　誠　一　氏

皆様、こんにちは。

山川港まち歩きガイドの組織「いっど、いっが山川港の会」の田中でございます。

客席にいるガイドの皆さん、恐れ入ります、ちょっと立って後ろを向いてください。このようなユニフォームを着まして、まち歩きガイドを行っている団体でございます。

このたびは名誉ある賞を頂戴いたしまして、誠にありがたく、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

皆様、山川港（やまがわみなと）をご存じですよね。薩摩半島の最南端部にあります天然の良港、そして今は枕崎と並びまして、かつお節の一大生産地、そして皆様も口にされたことがあろうと思いますが、あの懐かしい山川漬の発祥の地であります。このことは皆様、多分ご存じだと思います。でも、江戸時代以前の山川港についてはどうでしょうか。実は、歴史的なビッグな事象が幾つかあったのが山川港であります。ちょっと紹介してみましょう。

1546年、ヨーロッパ人が初めて日本にやってきたのが山川港であります。ポルトガルの商人ジョルジェ・アルバレスという人がやってまいりました。そしてその３年後、1549年、あのポルトガルの宣教師フランシスコ・ザビエルが、キリスト教布教の期待を持って日本に初めてやってきたのが、山川港であります。そして江戸時代初期、1609年に薩摩藩は幕府の許可を得まして、琉球侵攻を行いました。それを機に、山川港は鹿児島城下の外港、そして藩の琉球口貿易や島々との交易等、藩の交易の港として指定され、江戸時代を通して目覚ましい繁栄を遂げました。

そしてもう１つ、江戸時代中期、1705年、地元の百姓、前田利右衛門が初めて琉球からカライモ苗をもたらしたのが山川港であります。それ以後、薩摩全土に急速に普及し、そして

30年後にはあの徳川８代将軍吉宗が相次いだ飢饉の救荒作物として、「薩摩からカライモを取り寄せて全国に普及せよ。」という命令を出しまして、あの蘭学者の青木昆陽先生がカライモ苗をもらい受けに来て、全国に急速に普及し、救荒時の作物として多くの命を救ったというあのカライモ。今ではサツマイモと呼ばれておりますが、これは前田利右衛門の功績によるところが大であります。

今、４つほど事跡を紹介いたしましたが、実はこういう私自身も、前田利右衛門を除けば10年前は何も知りませんでした。私は、平成15年に定年退職を機に、ふるさとにＵターンした組でありますが、帰ってきてまず驚きましたのは、郷土史に関する研究が目覚ましい成果を上げておりましたことです。夢中で勉強いたしました。そして、自分の頭の中だけでとどめておくのはもったいないなと思うようになりました。

しかし、現実の生活の場として山川港は、かつお節の一大生産地、あるいは農作物のブランド品としてのソラマメあるいはオクラの産地でありながら、少子高齢化の波をまともにかぶりまして非常に沈滞、無気力な雰囲気が町にあふれておりました。特に、日が落ちまして商店街のシャッターが下りますと、町には誰一人、通らない。そういう光景がありまして、都会から帰ってきた者にとっては非常に異様に感じたものであります。

ところが、ちょうど今から５年前、官主導ではありますが、非常に人気があった日曜朝市、これを常設化しようという動きが起こりました。これを機に、地域を活性化するグループとして「元気な山川まちづくりの会」が立ち上がりました。会の目的は、歴史的・文化的・産業的資産を掘り起こして、これを利用して元気なまちづくりを行う。あるいは山川の良さを地域内外の方との交流を通して認識し、ＰＲをするということ。そして、それらを達成するために、当面、ガイドを養成して、まち歩きを行うこと。この３つを決めたわけであります。

そして、そのときから約16回の研修を経まして、14名のガイドが誕生いたしました。

初年度は、約1,100名ほどのお客様にまち

歩きを楽しんでいただきました。その初年度の事業の中で特に良かったのが、私たちの会もその発起団体の１つになりましたが、「琉球・山川港交流400年祭」というものでございました。県レベルの「交流の再開宣言」が実現したほか、芸能交流では琉球舞踊の一流の踊り手が大挙、山川に来られまして、披露していただきました。誠にきらきらした見事な踊りでありました。

さて、私たちのまち歩きコースは、主要なガイドポイント３つほどが墓地の中にあります。春から秋にかけては雑草が、繁茂するわけでありまして、これをどうしても除去しないといけないということで、老骨にむち打ちながら墓地の清掃をいたしております。このことは結構、地元の方々からも評価されているみたいでございます。

さて、２年目になりますと、だんだん客足が少なくなってまいりました。そこで某ホテルから、「新幹線が全線開通して客が多くなることが見込まれるけれども、まち歩きのミニ版として『語り部による山川港の歴史散歩』をお客様相手にやってくれないか。」という要請がありまして、これに乗りました。やってみましたら、「結構いける。」という反応がありまして、その年の６月からやり始めて、現在まで約8,500名のお客様相手に、語り部による事業をご披露しております。

それからもう１つは、私たちのガイドの事務所は、大隅半島の根占と山川を結ぶフェリーの営業所の一室をお借りして事務所にいたしております。薩摩半島と大隅半島を南端部で結ぶこの航路は非常に重要な道だと認識いたしまして、両地域の住民はもとより、その周辺の

住民まで含めて交流と協調をしていくということが、非常に大事だと考えております。これからも、ここの振興を進めてまいりたいと考えております。

また、指宿地方は、桜島や霧島と並び、豊かな温泉と地熱に恵まれております。ジオパークの認定に向けて何とかこぎつけたいということで、民間で組織されました「指宿ジオパーク研究会」の一翼を担い、研究を進めているところでございます。

さて最後に、今、我が会が取り組んでおりますのが、山川港が歴史上最も繁栄しました1700年代、この様子を畳２畳分ぐらいの立体模型にしているものを今、制作中であります。これができますと、地元の方々あるいは観光客を含めて見ていただけるような場所に展示をして、往時の繁栄した町の様子を見ていただければいいなと思っております。特に、江戸時代を通じて縁の深かった琉球、沖縄の方々に見ていただくのを楽しみにいたしております。

以上、「いっど、いっが山川港の会」の活動実績について触れました。私たちは地元の歴史や文化に着目して、それに徹底的にこだわって、地元の人にも外からの人にも、まち歩きを楽しんでもらうという事業を継続したいと考えております。

この受賞を機に、私たちの会はますます「何とん知れん」ことに取り組み、高齢者の「知恵」と「経験」と「パワー」を地域貢献に役立てていきたいと考えております。

どうもご清聴ありがとうございました。